

1984年度春季研究発表会

運営の側から

例年、春季研究発表会は地方で開かれるが、今年は5月16日(水)から18日(金)まで、小樽商科大学で開催された。北海道の大会は今回が5回目であるが、小樽市での開催ははじめてであった。なぜ、交通の便もよく、会場の施設も豊富にある札幌ではなく、ローカルな小樽になったのか正確にはわからない。小樽商大には、小さな大学としては比較的多数OR学会の会員がいること、札幌に近いこと、短大部があるので平日でも教室を確保できること等の理由が考えられる。

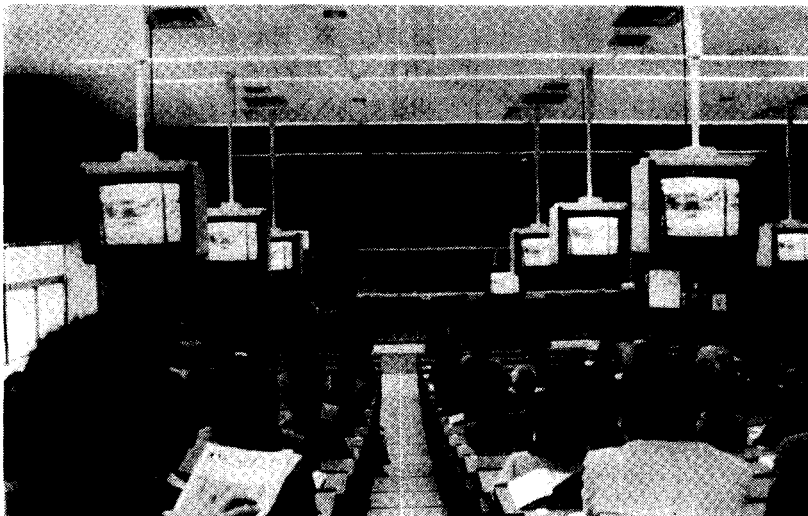
実行委員が指名され、特別テーマの選定になった。種々議論されたが、「安全とOR」が安全だろうということになり、特別講演者の選考に入った。大学から1人、企業側から1人の線で折衝が進められ、地元の小樽商大から藤江 正氏、北海道電力の推薦で古村哲也氏になった。「安全とOR」の特別テーマには、当初の予想ほど論文数が集まらなかったが、全体では、百数編のアブストラクトが送られてきた。

大会の運営は、一種のオペレーションズ・リサーチで

そのためには、準備7割、本番3割といわれるくらい、準備には万全を期したが、なお、ゆき届かなかった点、お詫びしたい。大会前には比較的暖かく、ストーブは必要ないとみたが、それでもストーブと石油を用意しておいて会員の中からありがたい言葉をいただいたのは幸せだった。

大会の運営には外部からの有形無形の援助がかなり必要である。多方面からご支援を賜ったことに感謝したい。収入は、参加者の多少に左右されるので、参加者数の予測が問題になる。6年前の札幌と同じくらいと推定したが、若干下回り200名弱であった。関心をもつ方々が少しでも多く、大会に参加して下さるよう種々のPRを行なったが、効果は少なかった。アルバイトは、大会当日よりも準備時点でもっと雇えば、実行委員の研究時間のロスの削減ができたかと反省した。ただし、ワードプロセッサや計算機等OA機器の活用により、事務能率にはかなりの改善があった。

16日の懇親会には104名、18日の見学会も53名と、予想を上回る参加者に主催者側も驚いた。懇親会には小樽商大の藤井栄一学長も来賓として出席され祝辞を述べら





れた。見学会は、小樽港にある第一管区海上保安本部の情報センター、余市のニッカウキスキー工場を訪問し、そのあと、積丹半島をめぐる、小樽市内のガラス細工工場をみて解散した。なお、懇親会と見学会については参加者1人当たりについていくばくかの援助をすることができたことを付記しておきたい。

遠路はるばる、まだ残雪のあった北海道・小樽の大会に積極的に参加された会員諸氏に心からお礼申し上げます。
(大会実行委員)

大会ルポ

北海道は例年になく寒く、16日の午前9時頃、小樽市内のホテルからタクシーで会場の小樽商大に着くと、北風が肌をさした。少し時間があつたので、休憩室で熱いコーヒーで体を温められたのはありがたかった。

目次をながめると、発表は全部で102件(内ペーパー・フェア、研究部会報告12件)ほどで、26件は企業、4件は大学と企業の共同研究、60件が大学関係の発表であつた。

特別講演は、16日に日本ユニバックの古村哲也氏の「大地震に対する地域の危険度評価」、17日に小樽商大の藤江正氏の「スポーツの事故と安全について」であつた。

古村氏の講演は大地震のさいの人間行動および危険度評価について、最近の新潟・宮城県沖地震の実写フィルムなどをとり入れ、小樽商大誇るところの8台の大型テレビからなるビデオ・システムを使って解説され大変興味深かった。

以下、個人的興味から信頼性関係会場を中心に、印象に残った発表を少し述べてみたいと思う。

16日の午前のD会場の1番目は東工大の宮崎和幸、森雅夫氏らの「多段階生産システムにおける生産率の近似解法」では、従来この方面の研究はシミュレーション実験によるものが多いなか、単純な仮定からマルコフ・モデルで定式化し、数値計算による厳密解および近似解を求めていた。電電公社の高橋成美氏の「間欠故障の評価法の検討」では、間欠故障をマルコフ・モデルで定式化し、装置の機能が完全に止まっている状態のみに着目し、より現実的な不稼働率の導出を提案して、今後の信頼性設計に対する有効性を示唆されたが、測定に若干問題があるように思われた。

次の17日は前日より多少温かかった。はじめに聞かせてもらった発表は、金沢工大の三道弘明氏らの「最適時間打ち切り寿命試験計画に関する考察」と題して、時間打ち切り寿命試験計画法で試験時間と破壊個数に効用を、パラメータにpriorを仮定して定式化を行なっていたが、効用関数とpriorの決め方に問題があるように思われた。また会場からは、分散やエントロピーなどを評価規準にすべきなどの意見がなされた。

部会報告については、他の部会報告に比して、最近のマイコン・ブームを反映してか「第三世界とマイコン」研究部会の報告が盛況で、座る席がないほどなのはびっくりした。

終りに、運営に当られました実行委員や学生の方々に感謝いたします。
(法政大 城川俊一)